

# マレー半島縦断 東南アジア 鉄道の旅①

旅行部旅行課 近藤節雄

## ● 2千キロヘスタート

大きなドームのバンコック中央駅に集まってきた乗客と見送人は、ほとんどタイ人である。

私は数年来の念願を果たすべく、バンコックで一仕事を終えた後、シンガポールまでの長い列車の旅にでかけた。当地でも指定券を入手するためには、事前に駅のブックイングオフィスで予約しなければならなかった。私は駅の待合室で整理券をもらいながら、タイ語で自分の番号を呼ばれるのをジッ



と待ち、ようやくこれを手に入れた。

## ● 時速50キロの猛スピード

この旅は、タイの首都バンコックからマレーシアに入り、パターワース(ペナンの対岸の都市)、クアラランプールを経てシンガポールまでの蜿蜒二千キロの旅である。距離にして、東北線一ノ関から鹿児島までに匹敵する。

五月八日、十二時十分発のハジャイ行急行列車でバンコックをあとに、郊外のリゾートビーチとして知られるホアヒンへ向かった。パターワースまでは、タイ鉄道のディーゼルが走る。郊外へ出るともう完全に田舎だ。粗末な民家と田んぼの中を時速五十キロの超近代的なスピードで走りぬける。

列車は二等である。明日からはずっと一等なので我慢したが、エアコンのない二等車に西陽がさし込むと、もうじつとしていられない。座席は指定だが、出発間際になってやっと乗り込んだ私のシートには、すでに他人様ののっかい荷物がのさばっている。

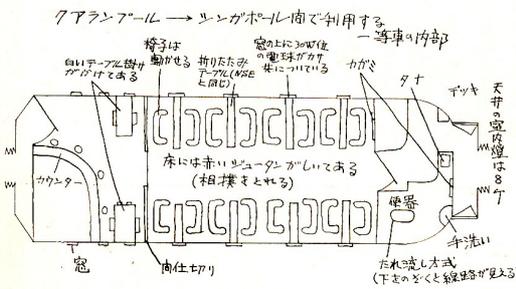
それでも列車は、実に正確に、バンコックをはなれた。実に遅々と、点々と降りながら、ホアヒンへ到着したのは十七時だった。

## ● 水牛様のお通りだ

さて、こののんびりした田舎町で、タイの漁村の実にくったくのない雰囲気

気にまる一日たっぷり浸り、好い気嫌で翌九日夜のパターワース行き特急列車に乗り込んだ。二人で一室のコンパースメントで、すでに下段にはタイの学生が寝ていたので、音もたてずに眠りこんだ。

日本式に行き届いた車内設備で熟睡すると、翌朝強烈な日光と停車のシヨ



ックで目覚める。うす明るい朝のしじまのなかで、年老いたやせぎすのポーターが大きな荷を管々とかついでいる。今日もゴールへ向かってわれらも列車は驚進する。

平地のなかに突然岩山があらわれたり、少しだが、変化も見せる。ヤシやバナナは云うまでもなく、パイヤヤ

マンゴーも窓越しにみられる。

心から楽しくなるのは、正に人間的な光景に出会った時だ。ハダカの子どもたちが、必死に手をふっている。列車の進路を水牛が妨害する。警笛なぞどこ吹く風の悠長さ。我等が機関士が折れて、水牛様をお通しする。

頭に来た彼氏がつい停車場を通過してしまった。約二百村。列車はがんとしてもどらない。今度は駅員が折れて自転車でタブレットを届けに来る。これに似たシーンが度々あった。

## ● 15両編成で7種類の車

暑い日射しも日本製冷房車がはね返すが、二人で一室の寝台車では退屈とばかり、暑い民族情緒たっぷりの二等車へ出張する。ここには土の臭いがある。ほとんど大きな荷物をもった遠くへ旅行するタイ人だ。

人なつっこい土地の人びとが話しかけてきて、たちまち国際交流の場となる。珍らしいチャーハンの出前、ドリンク、そしてアイスクリーム売りが行ったり来たり。たまにはハエも寄ってくる。

その間、列車は平坦だが、単調な農村地帯をひたすら走りつづける。よくもこんなに種類があると思える程、多種の車が連結されている。一、二、三等車、一、二等寝台車、食堂車、郵便車等、十五両の編成である。

## マレー半島縦断 東南アジア 鉄道の旅②

旅行課 近藤節夫

### ●マレーシアに入る

十一時三十分、マレーシア国境の町パダンベサーに着く。約一時間停車している間にやるべきことは、①入国手続きをする(マレーシアのビザを持ってない私は、十六日中にマレーシアを出国する条件をつけられた)②時計をマレーシア時間にあわせる(三十分進める)③タイの通貨バーツをマレーシアドルに両替えることである。

発車を待つ間に、かわいい子どもがバナナと夏ミカンを売りに侵入して来た。一本十円にも満たない。残り物を全部買ってやったら喜んで帰っていたが、出発前に同志をつれて再び来たのには参った。

マレーシア領に入ると、町の看板からタイ文字が完全に姿を消した。乗客は減る一方だ。窓外には、少しずつマ

レーシア色が目についてくる。ソンコ帽をかぶった男たち。パテックをまとった女たち。タイでは、稲刈り後だったのに、ここでは田植えをしている。雑木林のなかを走ったり、熊笹をかきわけて走りながら、ジャングルをひたすら終着駅へ。

さて、朝・昼兼用のブランチを食べに食堂車へ行く。ウエイトレスのいないのが殺風景だが、あいさつの良いオッサンが少ない我々お客さんにしきりに世話をやいてくれる。タイ、マレーシアどっちの通貨でも良い。そして安い。となりのインド人からは、新鮮なマンゴーを頂戴する。この国特産の蜿蜒とつづくゴム園は、いやでも目につく。

### ●つわものどもが夢の跡

日本軍名残りのアロールスター、スイゲイパタニをすぎて、バッテリーに近づく頃には、南の国の青空に夕焼けが見えて来た。列車は遅れて、五月十日夕方六時、このバッテリースヘたどりついた。一一六〇キロを走破したわけだ。ここで十三日夜のクアラルンプール行き列車の予約をすませた。

フェリーで対岸のペナン島へ行き、島内で観光を楽しみながら、十二日、マレーシア東岸のコタバルへ飛んでみた。ここは、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争開戦の日、タイのシンゴラ

作戦に呼応して荒波のなかを旧日本軍が疾風の如く上陸した歴史的海岸だ。その海岸へも行ってみた。当時の風雲は、うかがうよすがもなく、海水浴に来た子どもたちのはしやき回る声、やけにむなしく聞こえた。

再びペナンへ戻り、十三日、今夜の列車はひたすら眠りつつづけるとの決意で、バッテリー駅へ。



タイの木炭機関車

自由港ペナンからバッテリースヘ渡る場合、同じ国内でありながら税関検査がある。あけたトラックにゴキブリが飛びこみ、ついにクアラルンプールまで運ぶはめになった。プラットフォームは見送りのマレー人、インド人、中国人で一杯である。複合国家の一面を見る思いがする。人波にもまれて缶ビールを買いこむチャンスを失した。

### ●乗心地満点の寝台車

さて、ここからシンガポールまではマレー鉄道。タイ鉄道と違って、寝台車は重厚な感じの個室だ。土地の人たちにはほとんど乗るチャンスがないのか、カーテンをあげておいた私の部屋を興味深そうに、窓越しにのぞきこんで通る。定刻二十一分十分がガッタンガッタンとスタートした。空にはまばゆいばかりの星、星……。

乗り心地は満点。ソンコ帽をかぶった車掌が明朝のモーニングサービスをききに来た。「コーヒー」を頂くことにする。七時にはクアラルンプールに着くので、早々とベッドにもぐり込む。白河夜舟のまま、六時すぎ「コーヒー」の声に起こされた。コーヒーを飲みながら、首都に近いマレーの田園風景を眺めていると、ぼんやりした頭もすっきりしてきた。

近世と中世が美事に混合した首都、とりわけ回教色の濃いクアラルンプール駅に七時十五分到着。ここでは、バッテリーケーブやゲンティンハイランド(有名なトバク場)を見学したあと、旧都マラッカへ飛んで歴史ある落ち着いた小さな町をくまなく歩いてみた。再びクアラルンプールへ戻って、十六日朝シンガポールへ向かった。この間は、じっくりマレーの珍らしい情緒を味わえる。

マレー半島縦断  
東南アジア  
の旅③

旅行課 近藤節夫

## ●王候気分の快適な旅

その時まで私はほとんどマレー人と  
思われていたのだが、このプラトゥフ  
ホームではからずも若い車掌にタイ人  
と間違えられ、ついに決定的に非日本  
人的アジア人になりきった。

一等車には、たったの四人しか乗客  
はいない。マンツーマンサービスに近  
い待遇をうける。例によってマレー鉄  
道は、定刻にクアラルンプール駅を出  
発する。これは夜行ではないので寝台  
車がついてない。一等車は赤ジュエタ  
ンを敷きつめ、マホガニー塗りの車内  
三分の一は食堂で、残りにはゆったり  
とした椅子がスペースたっぷりにおい  
てあり、王候気分にあたりひたるこ  
とができる。エアコン付きの車内は、  
他の車両にくらべるとぐっと快適であ  
る。二、三等車にはエアコンがないの  
で、窓を全部開けっ放している。風が  
じゃんじゃん入ってくるので、土地の

人が気持ち良さそうにうたたねしてい  
る。窓外の風景には焼山も見える。

## ●牛も人もホームで昼寝

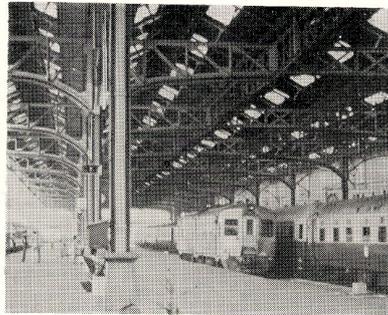
十二時前にゲマスに着く。ここで反  
対方向の列車を待っているのだが、プ  
ラットホームには見慣れない牛がねそ  
べっている。放し飼いだ。カメラを向  
けたら、ぐっとにらまれた。改札係が  
いるわけでもない。待合室には、昼寝  
をしたり、ひまを持てあました老人  
がひっくり返っている。対向列車が来  
ないうちは大丈夫だ。駅前の駄菓子店  
をのぞいたり、停車している貨物を見  
学したり、見世物にことかかない。ラ  
ワン、チーク材等、木材の宝庫なの  
で、これを積んだ長い長い貨車が木炭  
車に索かれて出を待っている。

予定より十五分遅れてゲマスを出  
た。年輩のボーイが、昼食をとるよう  
に言ってきた。お言葉に甘えて安くて  
おいしいチャーハンをとる。次にビー  
ルをすすめてくれる。これにもつい手  
が出る。

## ●猛烈なスコール

さて、くすんだツートンカラーの英  
国製列車は、ジャングルを、高原を、  
まっしぐらに走りつづける。クロンの  
近くでは、高級将校の官舎ではないか  
と思えるシヨシヤな家並が続く。快  
晴で突き抜けるように青かった空に、

いつの間にかどんよりとした雲が見え  
てきた。と思う間もなく、十五時ジャ  
スト、真暗になった中天から雨が降っ  
てきた。激しい降りだ。これこそ、南  
方の代名詞「スコール」の襲来である。  
線路沿いの街道を自転車に乗ってい  
る人、歩いている人、ずぶぬれなのだ。  
十分さっかりで雨はあがった。とにか  
くすごい雨足だった。百円の遺失物の  
傘なんか完全にぶっこわれちゃう。し



クアラルンプール駅

かし、このスコールですら我々日本人  
には感激的なのだ。

再び青空が見え出した。長い旅にあ  
きたのか、退屈そうな車掌はリラック  
スして昼寝をむさぼっている。

マレーシアとシンガポール国境の町  
ジョホールバルには、十五時三十五  
分着。係官がのり込んで簡単な入国審  
査をすませれば、もはや目的地には着  
いたようなものだ。ところでこの係官

の質問は、旅券を見ながら「マレーシ  
アは楽しかったですか？」と実にヒュ  
ーマニティにあふれた質問なのだ。だ  
から期限の切れる十六日に約束どおり  
出国してやったのだ。

## ●遂に二千キロを走破

ジョホール水道もコーズウェイ(土  
手のような道路)を渡るのを一つの目  
的にしている人も多い。実際、シンガ  
ポール側から入国する時は、コーズウ  
エイの手前で入国手続きをすませてか  
らおもむろにジョホールに入る。にも  
かかわらず、我が列車は実にあっさり  
とコーズウェイを渡りきった。

列車は乗り継ぎとはいえず、延々二千  
キロを走破してよいよ終着駅。コーズ  
ウェイを渡りながらデッキから顔を出  
す我々に、バス、車、自転車からしき  
りに手をふったり、ウィンクしたり旅  
のフィナーレにふさわしい交歓風景を  
かわしながら、山下兵団ゆかりのシン  
ガポールはプキテマを通り、十六時十  
五分ついにシンガポール駅へたどりつ  
いた。一等車には、私のほかに若いド  
イツ人しか残っていないが親しく  
なった彼とも別れて、タクシーのかけ  
声をのぞけば、あまり賑やかでもない  
シンガポール駅で、道草をくいながら  
も、長途の旅を卒えた感慨にひたりな  
がら、親しみをおぼえた列車に別れを  
つけた。

ツアー発売とともに評判になった小田急線内中吊り広告

# アジア国際特急南へ駆ける

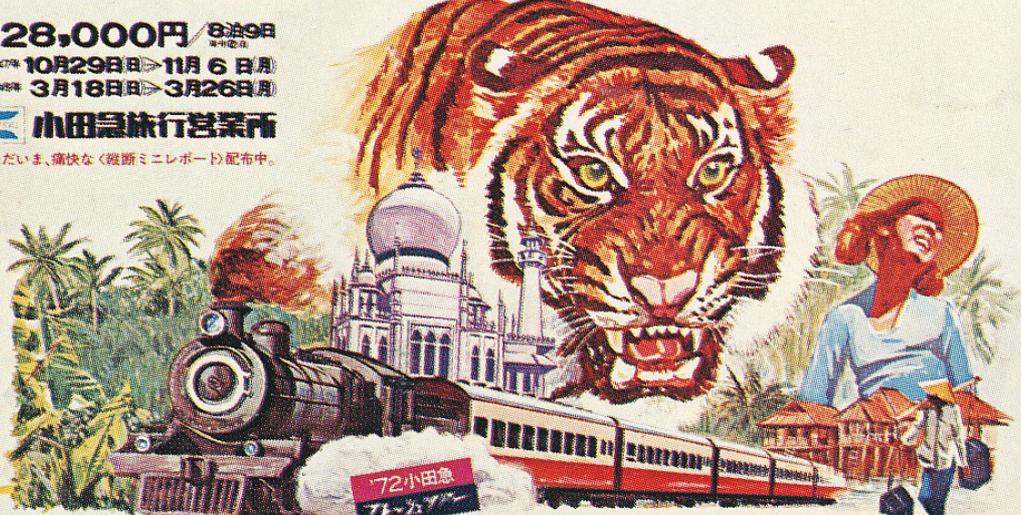
バンコク→クアラルンプール→シンガポールを結ぶ灼熱のアドベンチャーツアー

228,000円 / 8泊9日  
※12名以上

昭和47年 10月29日 → 11月6日  
昭和48年 3月18日 → 3月26日

 小田急旅行営業所

●ただいま、痛快な(縦断ミニレポート)配布中。



マレー半島縦断2,000キロ鉄道の旅